

ちば・谷津田フォーラムの設立にあたって

千葉県立中央博物館生態・環境研究部 中村俊彦

私が谷津田を意識したのは小学校の二，三年生の頃だったと思う。その頃，学校の行き帰りや放課後，いつもみんなで谷津田に遊びに行ったものだった。

春の谷津田はセリやツクシ採り。セリはみそ汁で，ツクシは卵とじがうまかった。夏は，イネの生い茂った田んぼでドジョウやメダカ，フナを採り。夜にはホタルも取りに行った。ホタル籠の中にイネの葉をちぎって入れておいたら，「大事なイネの葉をこんなにちぎって---」と父親からひどく叱られた思い出もある。秋には，イナゴや赤トンボを追いかけ，雑木林でアケビ採りやクリひろいもした。寒い冬には，田んぼに張った薄氷でスケート遊びの経験もある。

子供の頃の私にとって，谷津田は遊び場であると同時に，自然をいっぱい学び体験できた，きわめて魅力的な空間であった。時には嫌いなヘビに出くわし，逃げ帰ったこともあったが，予測できない事に出会える冒険と発見の世界がそこには展開されていた。さらに，米づくりや農作業の様子を間近に見るにつけ，お米の大切さや農作業の大変さの一端を肌で感じる谷津田でもあった。

現在，私は博物館の研究者として千葉の自然を調査したり紹介したりする仕事についている。しばしば外国の研究者に千葉の自然を案内する機会があるが，そんな時の彼らの谷津田自然に対する興味は，最初のうち私にとっては異様なまでであった。外国の数十人の研究者を房総方面に案内したときには，稲刈りの状況に，突然バスを止めさせられ，彼らが写真を撮るのに 30 分近くストップさせられた経験もある。彼らが常に口にするのは「谷津田の美しさ豊かさ」である。私が，それまで何気なく接していた谷津田自然の素晴らしさに気づかされたのは，実はつい最近のことなのである。それ以来，私は谷津田とこれを取り巻く自然環境を自分自身の研究対象として意識し博物館の同僚や学校の先生，また大学の学生との共同研究をしてきた。

谷津田とその周辺の自然（谷津田自然）は千葉県の代表的な自然環境の一つであるが，この自然は，縄文時代後期から約 2 0 0 0 年以上におよぶ先人達の自然の中での営みや伝統的農林漁業につちかわれた，いわば人為による二次的自然環境である。私どもの最近の研究の結果，だれもがなれ親しんできたこの谷津田自然は，人間の生活・生存にとって最も豊かなもの一つ，いや世界一豊かな自然環境であることが次第に解明されつつある。房総の本来的な自然条件，すなわち気候や地形・土壌から，水，みどり，野生生物においてその素地の豊かさは世界的にも類例をみないものである。これに対し，我々の先人は，様々な経験と知識をもとに，この自然を守りつつ，そのポテンシャルを最大限に引き出した結果が谷津田自然と言えそうである。現在，世界人類が求めている「自然と人の共存とサステナビリティ（持続性）」にとって，千葉の谷津田自然は，他に類例を見ない完成されたその生態系モデルであると言えよう。

私は博物館の準備室に就職して 15 年間，自分では中央博物館を「千葉の自然を守る砦」として頑張ってきたつもりである。博物館も今年 10 周年を迎え，スタッフや

資料も充実しつつあり、また、来館者からもおおむねの評価を頂けるようになって来たように思える。しかし反面、その間、千葉の自然はどんどん後退、消失している現実にはたいまれない思いはつねのりばかりである。10年前に完成した博物館の自然の展示も今では過去の記録になりかけようとしているが、このような状況は我々の手で何とかしなければならぬ。

そんな思いで立ち上げた「ちば・谷津田フォーラム」であるが、世界に誇るべき千葉の原風景の谷津自然とその伝統文化を守り復活させるため、農家の方をはじめ市民行政、政治、さらには開発事業等に係わる方々のできるだけ多方面、多分野の方々のご参加とご協力をお願いしたいと思います。

休耕田を活用したトンボ池造り

ライオンズクラブ 環境保全、災害対策研究委員長 椎名 益男

【1】トンボ池づくりの呼びかけ

L i o n誌 '99,6月号 30 頁に「自然は人々を癒し、そして心を和ませてくれます。」と書かれて居りますが、少しでも残っている自然環境を保全し、そして破壊された自然をビオトープ活動(L i o n誌 '98,7月号 32 頁参照)で修復して、素晴らしい自然環境を子供達に、そして更に後世に残して行くことが、たった 50 年たらずで自然を破壊してしまった私達の罪滅ぼしであるし、義務であると思います。

日本固有の繊細な生態系で形成される自然環境の保全の問題を日本のシンボリックなトンボにこだわって考えたいと思います。その訳は、日本は昔、豊葦原瑞穂国(トヨタシハラミスホノクニ)と云い、アシがよく繁茂し、みずみずしい稲穂が稔るトンボの生息には絶好の環境だったようです。またトンボの古い呼び名を秋津(蜻蛉)と云い、日本のもう一つの国の呼び名「秋津島」に象徴されています。小さな島国のわりにトンボ相の豊かさは抜群で、日本人は昔からトンボと親しみ、愛してきたとの事です。

私の子供の頃千葉市でもアカトンボの様に沢山のギンヤンマ、オニヤンマが飛び交っていました。子供の時にギンヤンマ、オニヤンマと遊んだ思い出をお持ちの方々が元気で居られるうちに、なんとかギンヤンマ、オニヤンマの飛び交う昔の素晴らしい自然環境を少しでも復元しなければ、永久にそのチャンスを失ってしまう様な気がします。

上流に農薬がまかれたゴルフ場があるとその下流を流れる川は、水はきれいに澄んでいるのに生き物が全く居ないと云う本当に恐ろしい光景が見られます。小魚、小鳥昆虫が全く姿を消してしまう環境では最後には人間が生きて行けなくなってしまうでしょう。

333-C 地区(千葉県)には沢山の休耕田があると思います。谷津田(ヤツダ)は田とそれを取り巻く雑木林とがセットになって様々な生き物を育ててきた里山の自然を代表する場所でした。狭い山間にある田で農業機械の導入が困難だった為に減反政策によって真っ先に耕作が放棄されてしまったのが谷津田との事です。耕作が放棄されるとすぐに田やその周辺には雑草が生い茂り、やがて乾燥してトンボやホタルなどの水に依存する生物が住めない環境にかわってしまいます。そしてゴミが捨てられたり

建材置場となったりして荒れたまま放置されて居ります。

LCのメンバーが中心になり、小学生，中学生，高校生，大学生，そして一般市民の方々にも参加して頂いて労力奉仕によって、この荒れはたて休耕田を活用してトンボ池やホタルの里を造るビオトープ活動を展開して頂ければ文字通り水辺のクリーン作戦となるのではないのでしょうか。休耕田の現状に少しだけ手を加えて、トンボが住みやすい環境に整えるのがよいのではないのでしょうか。池をつくる際も、なるべく田の形を変えないように、そして谷津田は地形の高低をうまく利用して、上の田から下の田へ水が流れるように長年の経験でつくられていますから、それを活用した整備をする事がよいと思われます。また池の中への水草の移植以外、トンボをはじめ他の生き物の移植は行わず自然に住みつくのを待ちたいと思います。そしてヤゴをたべてしまうブラックバス，ブルーギル，鯉等は決して入れないで下さい。この休耕田を活用してのトンボ池造りの詳細については千葉県立中央博物館の倉西良一先生から御指導頂くことになって居りますので皆様の御理解と御協力を心からお願い申し上げます。

【2】実践報告「四街道LC楠岡巖Lion所有の休耕田を活用したトンボ池造り」

1999年8月7日(土)の環境保全セミナーで休耕田を活用したトンボ池造りのお話を少しさせて頂きましたところ、早速、四街道LC楠岡Lionからお申し出がありました。

8月26日(木)千葉県立中央博物館の倉西良一先生に同行して頂き、四街道市栗山の楠岡Lionの御宅に伺いました。

お家の裏には樹齢300年余りの杉の木を中心に雑木林が生い茂り、林の斜面から直接に田に連結する生態を示して居り、田の先にはまた雑木林があり、谷津田とそれを取り巻く雑木林がセットになって様々な生き物を育ててきた典型的な「里山」の風景でした。しかも、稲穂が実った水田のすぐ近くを成田エクスプレスや総武線の快速電車が行き交う素晴らしいステーションでした。

シオカラトンボ，アカトンボ，更にはオニヤンマの姿もみられ、また、ナミアゲハ，クロアゲハ，カラスアゲハ，モンキアゲハ等様々な蝶も飛び交い、林ではツクツクボーシ，アブラゼミ，ヒグラシゼミの合唱がきかれました。

「これ程素晴らしい場所がよく残っていましたね。」と倉西先生も非常に感動され、早速千葉県中央博物館の皆様とチームを組んで、この休耕田のトンボ池造りの設計をして下さることになりました。

四街道LC，栗山小学校，ボーイスカウト，ガールスカウト，また一般市民の皆さんの労力奉仕によって素晴らしいトンボ池が完成すると思います。

谷津田メモ-遺跡保存の立場から

ちば環境情報センター会員 杉田 権

谷津田保存に関する中心問題から外れるかと思いますが、遺跡の保存、さらにはまちづくりにおける歴史的資源の活用という観点から、谷津田をとらえてみることも必要ではないのでしょうか。

以下、整理されていませんが、ご参考まで。

谷津（田）を囲む広域保存構想の事例 - 東寺山遺跡群と貝塚町貝塚群 遺跡の保存から見たとき、個々の遺跡ではなく、地域の関連する遺跡群をとらえることが大切です。また遺跡の周囲の自然・景観も、重要なものであり、遺跡と自然とは、一体として保存されるのが理想です。そのように考えていったとき、各時代の人々の生活基盤であった谷津（田）がおのずと保存地域の中心になることが少なくないようです。たとえば千葉市教育委員会文化課策定『千葉市史跡整備基本計画』（1985年）の中で取り上げられている、二つの重要遺跡群、東寺山遺跡群と貝塚町貝塚群の保存構想をみてみると、いずれも、期せずして、谷津をとりかこむ形で、遺跡・自然・景観を広域保存するようになっていきます。

谷津田の保存のために遺跡の存在を利用しよう

遺跡は壊したらそれっきりで、再生できません。稀少生物と同じで、開発の障害になりえます。この遺跡の存在を利用しない手はありません。

谷津田の下に遺跡あり

谷津田そのものが文化財ですが、その下（かなり深いところ）に遺跡がある場合が少なくないことにも注目すべきです。近くの台地に縄文時代の貝塚・集落があれば、その谷津には水場や船着場など関連遺構の存在が予想されます（たとえば、荒屋敷支谷では低地性の貝塚が観察できるし、高品支谷ではどんぐりなどの晒し遺構の一部と思われる炭化材などが出土している）。また弥生時代・古墳時代の集落が近くにあれば、谷津田の下にその時代の水田遺構が存在する可能性があります（東寺山の谷津田でも、土師器片が発見されており、その可能性は十分ある）。谷津田はそれらの遺跡を保存するタイムカプセルでもありえます。

周辺の遺跡を調べよう

遺跡は、開発を阻止する力をひめています。しかし（それゆえに）この数年、文化行政内で、開発優先の政治的な圧力が強まり、文化行政の実態は、はなはだしく後退しています。保存の動きが起こるのを恐れているのでしょう。重要遺跡であっても（というより、重要遺跡であればあるほど）、それに関する情報を一般市民に伝えることに行政は消極的です。したがって市民が、積極的に、その方面の情報を得る努力をする必要があります。

遺跡の存在をしらべるには・・・

とりあえず、『千葉県埋蔵文化財分布地図』（千葉県文化財センター編）をみます。なおこの地図は完全ではありません。これをみて遺跡は存在しない、と速断するのは禁物です。現地を（何度も）歩いて自分の目で、地表に土器片など遺跡の痕跡がないか、人為的な造成の跡がないか、など観察することが必要でしょう。

地域の歴史・文化財を調べよう

一見、学術的に重要な遺跡ではなくても、地域住民が愛着をもち、地域の個性を表現しているものが、重要であることはいうまでもありません（石仏、祠、子字名、伝承など）。それらのネットワークの中でとらえるとき、谷津田の存在価値も大きくなるのではないのでしょうか。

行政の史跡整備の計画をしらべよう

行政による地域の遺跡整備計画があれば、参考にすべきです。

千葉市内で自然の保全を考えるには、『千葉市史跡整備基本計画』は一読に値します。いささか古いですが、なにしろ、責任ある公的機関が自然科学を含む各方面の専門家をまじえて作った計画であり、しかも現在、有効な計画なのですから、その意味は小さくありません。この『基本計画』は、最近、みやこ図書館にそなえられるまで、市民の目にふれられることがなかったようです。千葉市内の方は、ぜひ最寄りの図書館にそろえるよう請求してください。

南総地域の谷津田（やつだ谷田）の現状

夷隅郡御宿町 鈴木 藤蔵

谷津田の現状と合わせて、谷津田とはどういうものか、なぜ保全が必要か触れたい。

1．南総の谷津田とは

谷津田。これは、人と自然との結び付きを語る時に広く使われている。

谷津田は、南総地域では昔から人里から離れた谷間の水田（たんぼ）ということからやつだ谷田と呼んできた。

谷津田は「台地と台地の間の谷底の水田」

谷田は「丘陵と丘陵の間の谷底の水田」

で、いずれも地形としての谷間の水田のことである。

そして、丘陵と谷津田がモザイク状に配置されていて、北総台地に比して地形も生物も複雑、多様であって、その景観は、南総地域の原風景である。

ここでは、南総の谷津田を特にやつだ谷田と呼ぶことにしたい。

2．谷津田の現状

今、その谷田の多くが耕作放棄や休耕で荒廃し消滅している。耕作は続いていても食料としての米を収穫するだけの場となってしまっている。

能率の悪い谷田、高齢者耕作の谷田から耕作放棄は続く。林地転用、廃棄物・残土捨場に。さもないと荒廃が進み藪状か崩落して形を変え原生自然の谷状に戻っている。

そのうえ山林の荒廃で、里山に続く作業道も利用できないものが多い。

地形としては残っていても虫食い状態が多く、本来の谷田機能はせず、生態系は壊れ在来動植物の中には生息できなくなってしまうものが多い。

3．谷田とはどういうものか

(1) 谷田は、前述の地形の上に奥から谷の入口まで段々状で大きさの異なる水田が不

規則に続き、あるいは途中で畑や林があり一旦とぎれてまた続く。(いわゆる棚田(千枚田)とは異なる。)

(2) 複雑に曲がりくねった畦とテビ(てび手樋)*1、それにミノテ(みのて箕手)*2とフチ(ふち淵)*3の続く立体的配置の水田で、さまざまな傾斜や高低の異なるヤナ

(3) 最奥部や途中の沢・谷にせき堰のあるもの。

(4) 部分的に小川や土水路(土堀)のあるもの。

(5) その複雑で変化に富んだ地形の作業道に木橋や土橋*5が架かり、ヤナには小屋が建つ。

簡単にいうと本来の谷田はこのように形成されていたのである。

稲作という面からその機能を見ると、山林の谷筋からの流出水と堰に溜めた水を水田に入れ、ヤナ際からデス(です出水、湧水)も一旦テビで温め取り入れる。苗代時から田植え、その後の穂が出るまでこの水と雨水に頼るのである。その水の管理は、堤防であるクロ(くろ畦)と水門であるミノテによる。谷田の耕作者は、土木技術者だといわれている。

ここでの稲作は、土と水の管理いかにかかっている。春が来るとミノテやテビの修復や整備をしてクロ切り、クロ寄せ、クロ塗りをしてカベッタをうなう*6。水田を簡易貯水池とすればこれら作業は、堤防の修復工事といえる。また、小川や水路の整備清掃、ヤナ刈りをする。この間に大雨等の災害によるクロ・土手やヤナの崩壊(ビヤク)等の被害があれば主として丸太や竹材と土、シバ*7等現地調達で復旧工事も済ませる。そして、植えつけ前から朝夕まめに見回りをして水量を調節する。水管理は経験を要するもので、圃場整備の進んだ一般水田では配水管のバルブをひねればすむが、谷田では空もようと自然流水を見て判断し、ミノテの開閉具合で調節する。必要に応じ水路を堰止めて導入もする。堰からの水は主として最悪時の非常用としての利用となる。

堰、フチは谷田の心臓でミノテ、テビ、水路は動脈である。特に堰のない谷田のフチは、干ばつ時は重要な役目を果たす、水田の水が涸れ、デスも切れると、このフチの水を汲み上げるのである。耕作者の土木技術者としての工事は、地形により、作業道や土水路、ミノテやフチの位置を決めている。その方法は、まず、いかにしたら水田の面積を広くとれるか、水量は豊富か、大雨による被害はどうか等水利上の問題、日照はどうか、農作業の利便はどうか、工事の材料や能率は等まさしく土木技術者としての才覚がものをいうのである。その一例が水路である。水路は、水田の面積を広くとるため山林との境目のヤナ際に設けるのが一般的であるが、できるだけ山林側に寄せて設けるか、ヤナを部分的に隧道で結ぶ等して、しかも水田の日照を考慮した方向に設けている。

4. 谷田の自然環境

谷田は、わが国自然の凝縮地であり、その生物は多様である。

動物では、

水生昆虫類、

魚類・甲殻類(フナ・タナゴ・ドジョウ類、メダカ、ウナギ、サワガニ、ヌカエビ等)

貝類（タニシ類・カワナ類巻貝、マシジミ・イシガイ等二枚貝）

両生類（カエル類等）

爬虫類（イシガメ、カナヘビ・マムシ等）

昆虫類（トンボ類、バッタ類、ハチ類、チョウ類等）

鳥類（サギ類、カモ類、タカ類、キジ類、シギ類、キジバト、フクロウ類、
カワセミ類、セキレイ類、モズ、ツグミ類、ホオジロ類、カラス類）

哺乳類（ネズミ類、モグラ類、ノウサギ、イタチ、テン、アナグマ、タヌキ等）

これらは、山林を背景にして季節や天候、農作業の推移により移動しながら生活している。水生動物等は水田やテビの水が切れると、フチに一時避難して雨が降り十分な水量になるのを待ち、逆に大雨の場合はフチで流れの治まるのを待つ等谷田の変化に順応した生活をする。谷田の各水田・フチは古来からのビオ・トープである。

植物では、湿原性から草原性へ、豊かな林縁部を経て山林へと通じている。

テビ周辺でセリ。

手入れされたヤナでは山菜（フキ、ワラビ等）と、季節の花（スミレ類、ヤマユリ、オミナエシ、リンドウ類等）

林縁部ではヤマイモが育ち、果実類（ヤマグワ、イヌビワ、モミジイチゴ、エビツル、アケビ等）が採れる。ウツギ類、ヤマツツジ、アジサイ類、ノイバラが咲く。

このように、谷田やその周辺は豊かで景観は素晴らしく、人によって自然の食料生産場であり、農作業の合間の憩いの場となり、子供達には遊び場やおやつの供給場にもなる。

動物にとっては食物連鎖の起点ともいえるべき貴重な場所である。

水路や小川の流れは蛇行して瀬と淵があり、底質は砂と泥と小石と変化があり、岸边には植物が繁茂する環境でなければならない。

それが圃場整備の進んだ谷田は、機械化に伴い、畦（畔）は直線でミノテもフチもなく、小川や水路はコンクリートで直線的に排水路化され、改修された河川へと通じ、稲の成育期以外は乾田化され省力化された。これでは水生動物はもちろん両生類や水辺の鳥類は生息できない。水のないコンクリート水路内から出られないヘビ・カメ・カエル類等を見掛けるが心が痛む。

土水路のコンクリート化は水生昆虫や貝類、タナゴ類、ホトケドジョウ、メダカ、トウヨシノボリ、トウキョウダルマガエル等の減少や絶滅に通じている。

希少種ばかりか淡水魚類の多くは、人手の入った稲作とともに共生してきた。メダカを例に挙げると、何度も産卵し稚魚は二か月余りで成魚になるが短命と、水田の変化に順応した生活リズムになっている。その稲作サイクルばかりか、谷田を打ち壊してしまっただけでは生態系と文化の崩壊である。

5．谷田の保全をしよう

このように稲作 2000 年に及び先人の努力は、谷の奥までを段差を利用し、水利を考え水田として完成させ、そこで日常生活に必要な食料の供給を受け、自然との触れ合いの場として動植物と共生してきたのである。その谷田は、単なる郷愁や、目先の農村の原風景という景観保全ばかりではなく、多様な動植物を育ててきた食物連鎖の起点として重要な自然環境であり、先人の労苦を思い、谷田利用の技術保全と継承のための、わが国の文化財である。

この重要な谷田の保全は、一口でいえば、コンクリート化しないで

「引続き耕作する」

「周年水を蓄える」

「水路の手入れやヤナ刈りをする」

ことであるが、耕作は60歳代までで、70歳代になると作業は困難になってくる。

周年水を蓄えることについては、機械導入のためどうしてもむりで、一部にある手刈りのものでも、重労働で非効率のため実現が困難である。

それでは稲作に代えて谷田機能と環境を維持するどんな方策が考えられるのか。

- (1) ボランティア団体による耕作の継続やビオ・トープとしての管理等
- (2) 転作策として、水生植物等の栽培
- (3) 自治体等の買い上げもしくは管理による保全

等を速やかに考えるべきである。この谷田保全は、わが国農業の根幹に関わる問題であり、環境と教育機関を含めた行政の立場からも考えてもらわなければならないが、その前に早く、地域の現状に合った策を立てるべきで農業団体や自治体等地域の各種団体とが連携し手を打つべきである。

(注)

*1 てび手樋。手作りの簡易な灌漑用水路で幅は 30cm ~ 1 m。主にヤナ沿いに設けられる。

*2 みので箕手。水田に設けるみ箕のように左右に出ばった形の排水用口。水門。材料は丸太やそだ粗朶(木の枝束)、藁、むしろ等を使う。

[近年、生物の生態系を考えるとよくないが、増水対策として7~15cm程度のパイプを水田地下に埋めて、増水時一時的に自然にフチから下のフチへ一定水量を落とす方法がとられている。これは水路施設に代わるもので、稲をいためず、乾燥化に役立つ機械の導入に都合がよい]

*3 ふち。タンボ、オッポリ、ウケ等南総地域でも呼び名はいろいろ。ミノテから下の水田に落ちてできた「溜まり」のことで、形状、大小、深浅等さまざま。水の勢いを押さえるため周囲の粗朶(木の枝束)や竹で囲ったり、ヨシやガマが生えて動物の生息環境としては最良。「淵」同様の意味からこの名が出たらしい。

*4 やな。水田から林につながる間の草の茂る斜面をいうが、水田際の草の茂る斜面や土手を指すこともある。

*5 土橋は、木橋（丸太を並べたもの）に土砂を盛りシバを張って作る橋。

*6 クロ切り・・・前年に壁状に塗ったクロ（畦）の部分をクワやスキで切り取り、その面をカケヤで打ち固め、水漏れを防ぐと同時に新たに塗り易くするもの。

クロ寄せ・・・クロ塗りのために、クロ際に土を寄せ、こねて準備しておくこと。

クロ塗り・・・クロ寄せした土を、クワで畦際にドロ壁状に斜めに塗ること。ケラやモグラ、ネズミ等による水漏れを防ぐためのもので、堤防と同じ役目。

カベッタをうなう・・・稲株のある状態の最初の田のうない。田返す＝耕す で機械による機械的な田起こしとはやや異なる。

*7 シバ。芝ではない。付近の、表面に密集して雑草の生えた土。草の根のため芝状であり、張り付けてタケを刺し固定するとすぐに雑草が成長することで土砂の流失防止になる。

農業遊休地の再生と活用について

ちばMDエコネット事務局長 大槻 憲昭

1. ちばMDエコネット について

- ・10月18日、特別非営利活動法人（NPO）に認証。
- ・設立2年、会員約70名、年会費5,000円。グラウンドワークという地域の環境改善運動を通じて知的障害者の社会参加を目指す。
- ・事業として、船橋市から2公園の清掃管理を受託、300坪の農業遊休地にコミュニティ・ガーデンの建設、劇場用ドキュメンタリー映画の製作などを行っている。
- ・さらに、千葉市で 谷津田創造プロジェクト を展開したい。

2. これまでの経歴とラウンドワーク

- ・知的障害があっても、地域の普通学級で「共に育つ」ことを願って、20年ほど千葉県で活動してきた家族と支援者の会が母体。「共に育つ教育を進める千葉県連絡会」は21団体、18市町村に広がり、高校に16人が通っている。
- ・グラウンドワークを知り、参加。イギリスで80年代に始まったパートナーシップ運動で、地域の広い意味での環境改善を図る。日本では、(財)日本GW協会が95年、5省庁の共同所管で設立された。

3. コミュニティ・ガーデン について

- ・船橋の300坪農業遊休地を11年、無償で借用。農業公園を創設。
- ・地域の自治会、学校、大学、企業、NPOの協力で実施する。千葉県と船橋市が後

援を許可。(財)日本GW協会のパイロット事業認定。

4. 谷津田創造プロジェクト について

(1) 谷津田の遊休農地の借用と再農地化

- ・遊休農地の行政による借用
- ・市民参加の再農地化：グラウンドワーク（専門家の参加、地域住民、農民の参加）を軸とする。
- ・市民自然公園化と自然農法：蛸、トンボ、メダカの実験ビオトープを創り、安全な食物を食べる。

(2) 市民参加の まちそだて との協働

- ・若者たちの祭り：ロック・ジャズ・カーニバルを開催し、房州太鼓などにより地域住民と都市住民の新しい祭りを創出する。
- ・学校教育への活用：総合的教育の実践の場としていく。

(3) 地域企業 / 自治体との連携

- ・遊休地の活用を不動産会社に市民から提案
- ・自然を生かした"コーポラティブ別荘地"の建設
- ・谷津田の創造に参加した市民の共同別荘（ログハウス等）の建設・販売を図っていく。居住地近くの保養地と緊急時避難地を創造する。
- ・"国際地球村"の建設：海外からの旅行者や修学旅行生に働く場と安い宿泊施設を提供する。
- ・地域のホテル等と共同企画：地域のホテル、企業と協同で、祭りや地球村を街の名物とする。
- ・他の市町村との連携：例えば、和田町との企画連携を図る。

(4) 政府雇用対策との連携

- ・緊急雇用交付金対策と連携
- ・若い建築家、専門家、NPO関係者の雇用創出
市民参加の"まちそだて"を目指す。

5. 今後の進め方（案）

(1) ステップ展開

- ・まず、できるところ、できること、から着手する。
- ・候補地 / (1) 中島池後背地の湿地
(2) 大藪池上流の湧泉と谷津田

(3) 村田川周辺の谷津田など。

・スケジュール

1999年11月～2000年10月 第一期

谷津田創造プロジェクト 現地見学会

11月6日(土)午後2時30分 / JR土気駅改札

午後5時から地元住民と懇親会

(2) 推進組織体の構築

・理論的リーダー / 中村俊彦先生(千葉県立中央博物館)

・参加組織(予定) / プロジェクトとけ・ちばMDエコネット・ネットワーク

地球村・千葉をおもしろくする会、他市民団体

とけ環境安全協議会・地域の中学・高校・地域自治会他

(財)日本グラウンドワーク協会・東急不動産担当者・千葉市 or 千葉県職員

こだわってメダカってマップ

- 千葉県のメダカ分布図をつくろう -

千葉県立検見川高等学校 田中 正彦

今年2月18日に環境庁から「絶滅のおそれのある野生生物種のリスト」いわゆる「レッドリスト」が公表された。この中でもっとも注目を集めたのは、メダカがオオタカと同じ絶滅危惧類に指定されたことであろう。全国に五千種類以上の呼び名があり、もっともなじみ深いはずのメダカが各地で姿を消していくのはまったく意外で、マスコミもこぞってこの話題を取り上げた。そして、メダカの棲める環境が失われつつある現状を再認識したのである。

遊泳力が弱く移動力の小さなメダカは、谷津田を流れる土水路のような環境を好んで生息する。湧水の集まる土水路は一年中干上がることがなく、また大雨の時など流されずに隠られる場所を提供する。このようなところにはメダカだけでなく、絶滅危惧種 B類のホトケドジョウや同類のスナヤツメなども生息している。次のグラフは1995年から1999年に佐倉市内で確認された21種類の淡水魚類が、河川、枝沢、谷津のどの水域から多く確認されているかを水域別出現頻度(%) (水域ごとの確認地点数 / 全確認地点数 × 100) としてまとめたものである。ここで注目すべきことは、絶滅危惧種であるスナヤツメ、ホトケドジョウ、メダカが、河川のような大規模水域ではなく、枝沢・谷津という小規模水域からしか見つかっていないということである。このことは、谷津環境の保全がいかに重要であることを示している。

千葉県のある谷津田を後世に残したい。そのためには多くの方が谷津田に足を運び、谷津田の現状を自分の目で観る事が第一歩であると思う。そこで、谷津田の象徴であるメダカの分布を、みんなで調べてみてはどうかと考えた。メダカの分布を調べることは、良好な谷津の分布を知ることにもつながる。近くの田んぼや水路にぜひ足を運んでいただきたい。千葉県では、ちょっと足をのばせば、まだ田んぼのある風景に出会える。子供達と行くのもいい、小中学校の授業に取り入れてもおもしろいであろう。

カード方式の調査票「こだわってメダカってカード」に記録して、ちば環境情報センターに送ってください。それをもとに、千葉県メダカの分布地図「こだわってメダカってマップ」を作成します。みなさんのご協力をお待ちしています。

事務局から

1. 地域幹事の募集

地域ごとにとりまとめをしてくださる方を募集しています。ご協力をお願いいたします。

2. ご寄付のお願い

ちば・谷津田フォーラムの活動は、皆様の寄付や助成金によってささえられています。みなさんのご協力をお待ちしています。同封の振替用紙にて、ご入金いただければ幸いです。

3. bay FMより、助成金として14万円が交付されました(平成11年10月31日)

・1999年10月23日幕張NTTビルで行われた「ちば・谷津田フォーラム」では80名を超える参加者があり、本会が承認されました。当日はカンパも51,346円集まり、谷津田保全への期待の大きさをあらためて感じました。

<ちば・谷津田フォーラム組織・運営>

- ・代 表：中村俊彦(千葉県立中央博物館)
- ・副代表：岩田好宏(千葉県自然保護連合), 原慶太郎(東京情報大学)
- ・事務局：川本幸立(事務局長), 中山敏則(補佐)
- ・会 計：中山敏則
- ・編 集：田中正彦, 小西由希子, 松下優子
- ・幹 事：調査研究・教育普及(齋藤正一郎, 田中正彦, 栗原裕治, 小川かほる, 小西由希子)

保全活動(大槻憲昭, 中野雅藏, 高山斉一郎)

連絡先：〒260-0013 千葉県千葉市中央区中央 1-6-9 ちば環境情報センター内